### 5．ドナー肺に対する摘出前液体換気の肺保護効果について：心停止後兎肺移植モデルでの検討

山田義人，関根康雄，吉田成利
安福和弘，岩田剛和，藤澤武彦
（千大・胸部外科学）
篠塚典弘　（同・麻酔学）

Partial liquid ventiation（PLV）が心停止後肺移植での肺保護能，肺機能に与える影響について兎を用いて検討した。ドナー（n＝20）を通常換気，Partial liquid ventiation（PLV），PLV+冷却（PLVc）の3群にわけ，低血圧および心停止モデル下で観察した。血液ガス分析，肺抵抗性・弾性，組織IL-8産生量，病理組織像からPLVのドナー肺保護効果が示唆された。

### 6．急性縦隔炎手術症例の検討

岩田剛和，安福和弘，伊豫田明
関根康雄，渋谷　潔，飯笹俊彦
藤澤武彦　（千大・胸部外科学）
星野英久，斎藤幸雄（成田赤十字）
柴　光年（君津中央・呼吸器外科）
由佐俊和（千葉労災・呼吸器外科）

1991～2003年に手術した降下性壊死性縦隔炎10例（男/女7/3，16～82歳）を検討した。病因は歯性感染3例，頸部感染6例，特発1例。9例が下縦隔に及ぶ進行例だった。7例で嫌気性菌を認めた。全例頸部ドレナージ＋開胸縦隔ドレナージを行った。術後5例でDIC, ARDS, septic shock等の重症合併症を認めた。8例が軽快したが，糖尿病合併で術前全身状態不良の高齢者2例（20%）が死亡した。

### 7．手術を回避したい難治性気胸に対する胸腔造影下選択的Fibrin Glue閉鎖法：Thoracographic Fibrin Glue Sealing Method

長門　芳，栗原正利
（日産厚生会玉川・吸器外科，気胸研究センター）

重度低肺機能，合併症，高齢のため手術を回避したい患者に対し確実に気漏を閉鎖できる新しいInterventional Radiologyを確立した。胸腔造影下選択的Fibrin Glue閉鎖法（Thoracographic Fibrin Glue Sealing Method: TGF）である。73例に施行し69例が完全に閉鎖できた。気漏部の同定と薬剤の到達の確認が確実で気管支鏡下塞栓術に代わる優れた方法である。

### 8．PHYCON TCB気管支ブロッカー®による選択的肺葉ブロック

田辺（平澤）瀬良美，石川輝彦，西野　卓
（千大・麻酔・疼痛・緩和医療科）

巨大嚢胞を合併する肺癌2例および嚢胞性肺気腫1例における肺葉切除で，対側非切除部位の嚢胞破綻を防ぐ目的で，PHYCON TCB気管支ブロッカーを用い，選択的肺葉ブロックによる術中呼吸管理を行った。従圧式換気を行い，$PaCO_2$は高値ながらも$PaO_2$を保ち，嚢胞破綻を防ぐことができた。気管支ブロッカーの適切な位置での保持およびブロッカーより末梢での吸痰は困難であり，今後も課題として残った。

### 9．胸膜播種を伴う原発性肺癌の治療戦略

飯田智彦，木村秀樹，鈴木　実
安藤総一郎，中島崇裕
（千葉県がんセンター）

胸膜播種を伴う原発性肺癌症例の予後は著しく不良であり，その治療法は未だ確立されていない。われわれは胸膜播種症例においても可能な限り原発巣を切除した上，皮下に留置したポートから胸腔内化学療法を繰り返す方法を中心として積極的に治療を行ってきた。当施設で組織学的に胸膜播種が証明された26例の治療成績を解析し予後因子を解明すると共に，胸膜播種を伴う原発性肺癌の治療戦略について考察する。

### 10．非小細胞肺癌切除例のIL6（インターロイキン6）発現と臨床像との関連に関する検討

黄　英哲，飯笹俊彦，山地治子
常　浩，山田義人，石川亜紀
千代雅子，守屋康充，本橋新一郎
安福和宏，伊豫田明，関根康雄
渋谷　潔，藤澤武彦
（千大・胸部外科学）
廣島健三，中谷行雄
（同・基礎病理学）

非小細胞肺癌にて切除された90人を対象とし，術前血清IL-6値を測定し切除標本に対しIL-6免疫染色を行った。90例中43例（47.7％）に血清IL-6値の上昇を認め，免疫染色は23例（25.5％）で染色された。多変量解析ではIL6染色結果（0.0414）が独立した予後因子として選択された。非小細胞肺癌患者においてIL-6免疫染色陽性症例は進行症例では発現が強く，重要な予後因子の一つであると考えられた。